

子どもたちの「先」を見通した低学年指導～新宅先生～

新宅先生の話聴きながら、「未」という字が思い浮かびました。未がつく言葉、「未熟」「未知」「未完成」、そして「未来」。

新宅先生は、「低学年の子どもたちは、今を生きている。未来をつなげることを考えにくい」と語られました。「できない」「無理」など教師が限界を決めるのではなく、「未だできない」。未知、未完成なら、どうすれば、「知っている」「できる」「できそう」に変えていくか。そして、子どもたちが「できた」「こうすれば」と発見したり、自信を得たりすることは「未来」を切り開くことにつながる。「未来」が見えないからこそ、教師が「どうするか」、気付かせてもらいました。



子どもたちの楽しいが広がる体づくり運動～大森先生～



大森先生は、「緊張と緩和」を使い分けるのが秀逸。

体育は、多くの子どもたちにとって「好き」「楽しい」教科。しかし、「できない」「むずかしい」がはっきりしやすいだけに、「やりたくない」「ドキドキする」などの緊張の場面が多くなります。そんなときに、音楽を流したり、ハードルの低くない活動を行ったりして「できる」「楽しい」という気持ちにし、緊張を緩和する。緊張からの緩和が、「やってみよう」というチャレンジするエネルギーに。

しかし、「楽しい」など「緩和」だけではなく、「勝ちたい」「やりたい」などの心をくすぶりながら、緊張感を高める。ルールや作戦を考える。子どもたちの「緊張と緩和」使い分けが秀逸だから、引き込まれますね。

「らしさ」かがやく児童理解～山口先生・宍戸先生～

「柳が丘姉妹」、いえ山口先生・宍戸先生のお話は、まさに子どもたちの「らしさ」が輝くために大切になる「教師の見方・考え方」を教えていただきました。

山口先生は、「かぐられる」という事実を「なぜだろう？」と自分に矢印を向けて考えられていました。このお話、すごいですよね。「かぐるなんて…」と考え、子どもをせめてしまうこともあると思います。そうではなく、「自分の何を変えないといけないのか？」と自分自身について考え、「学ぼう」とアップデートされる。すごいですよね。子どもの姿から、謙虚に学ぶとは、こういうことかと思いました。

宍戸先生は、「一人のために記録会」を開催。一人ずつの特性などを理解した上で、「この子が輝くために、自分に何ができるか？」考え、行動されるお姿。すごいですよね。しかも、一人ずつのエピソードを語る内容が詳しく、愛情いっぱい。あのステキな笑顔で、「大丈夫よ！！」と言われる、子どもたちはどんなに勇気づけられるか。「伴走する」という言葉の意味を、具体的に示して下さいました。



座談会では、「子どもたちをどう見るか？」について、交流。児童理解につながる、教師の見方が磨かれました。